

詠懷乱雑篇

島田修三

子供時分、台風が通過して行く夜というのが何だか実に好きだった。父も会社から早めに帰って来たりして、兩戸を打ちついたり、庭木に補強材を結わえついたりする。近所の呑川と多摩川が氾濫する恐れがあるから、ほくたち子供もリュックに乾パンだの教科書だのを入れたりして枕元に置き、普段着のまま寝る。隣の部屋では夜通し両親が起きて、ラジオを聴いている。で、次第に風雨が強くなって来ると、スリリングな恐怖と快楽が全身を駆けめぐる。ササマジイ時化の大海に漂流するジュール・ベルヌの十五少年か何かになったような気がしていたんだな、あれは。たいがい翌朝は台風一過の日本晴れで、思ったより出水も少なかったりして、がっかりした気分で行ったものだ。

タイフーンひとつ過ぎたる夕暮れを漫々として月白の空

畏敬する年上の友人が一人息子を遠い旅先の事故で亡くした。事故の報が入ったときに、彼は取り乱す夫人にご飯を炊かせたそうだ。夫婦二人でどんぶり飯をムリヤリかき込んで、それから旅支度をした。悲しいときは、オマエ、飯を腹一杯喰うしかないんだよ、とドンブリ飯の謂を先日しみじみと語ってくれた。

水のやうに象かたちむすばぬ愁ひにて秋刀魚のはらわたしばらく苦し

ジュディ・ガーランドという、いかにもアメリカ人という感じの女優がいた。少女時代に「オズの魔法使い」でドロシー役を演じた人である。昭和十四年だか十五年だかの映画だけれど、ぼくは子供のとき、確か渋谷のミラノ座でリバイバル上映を観ている。夢から醒める直前の、あの巨大な虹に向かってライオンだの案山子だのとドロシーが歩いて行く場面は忘れられない。あの虹を通して、おそらく子供の頃はアメリカという国の広大な豊かさを見ていたのだろう。

街の上に片根をおろす秋の虹童女をおぶひつかの間あふぐも

太宰治の「閑閑日記」に「五尺七寸の毛むくじやら。含羞のために死す」という一節がある。ぼくは太宰はキライだけれども、この一節だけは執拗な呪文のように無意識の間から立ち昇って来ることがある。で、そんな時、どうなるかということ、笑いこらげているのである。

天に愧ぢ愧ぢざるとはとまた問ひて邯鄲しきりに鳴く夜をみる

某誌に書いたぼくの文章を、フェミニズムの運動家として頑張っている某女史が褒めてくれたそうだ。確かにぼくは《女歌》や《フェミニズム》のことを本論の枕にはあつたけれど、肝心の本論の方は、女子供をほつたらかしのしして、組織にアイデンティティーを求めざるを得ぬカワイソーな昔風亭主たちに万感の思いを寄せたものだ。読みようによつては、確かに非常にスナオな敗北宣言みたいだから、それで敵は good loser として塩を贈ってくれたのか知らん。

ちちふま
乳房のふたつ重たくある者の不思議に安けき寢息ぞ聞こゆる

十年ほど前だったか、真冬のポトマック河に旅客機が墜落して、多数の乗客が河面の半ば凍りついた極寒の流れに放り出された。いち早く駆けつけたハイエナのようなTVカメラは力尽きて水中に消える者や岸に泳ぎ着いた者たちの姿を追っていた。救出へリコプターがひとりの中年の男に救い綱を下ろしている場面をカメラはとらえた。男はかろうじて浮いているだけだった。

ようやく網の先の装着具が男に届いたが、なかなか身につけようとしなない。観ている方はハラハラしている（無論、ハゲワシのよくな視聴者のことだ）。そのうち男は数メートル上流に泳ぎ、そこに浮き沈みしていた老婦人を抱きかかえて装着具を着けてやった。それから男は力尽きたようにゆっくりと流れの中に沈んでいった。

わがために費やす命のけだるさや〈近代〉暮れゆく東洋の秋

「バック・トゥー・ザ・フューチャー」の主人公はEisenと揶揄されると、とたんに前後の見境いなくなってしまうのだが、ほくも青年時代の或る時期までそんなものだった。あのチビのアメリカ青年と違う点は場数を踏んでいたことで、とっさの場合でも負けるケンカはしなかった。しかし、指を折ったり、歯を欠いたりはした。で、もうこういうクダラナイ事はよそう、と自らに誓ったのは、大学時代にそのスジの男に殴られてからである。狭いバーの出入り口で、カウンター気味のフックを頬にもらって三メートルくらい吹っ飛んでしまった。一緒にいた友人も続けて飛ばされた。斯道斯界の底知れぬスゴミに触れた思いであった。

人格のまろやかたれと世紀またぐ住宅ローンのささやく日々ぞ

小学校低学年の頃、ひとりでバスに乗って東京池上の自宅から川崎まで毎週通っていた。ほくはボンヤリした子供だったので、よく川崎駅行きとは違う路線のバスに乗ってしまう。その頃、路線バスにはバス・ガールがいて、この人たちが実に親切で優しくかった。今度は間違えちゃダメよ、などとほくの乗るべきバスを正しいねいに教えてくれ、最寄りの停留所で降ろしてくれる。もちろん料金はとらない。ほんとうに懐かしく優しいオネエサンたちだった。仕事に誇りと喜びを持っていたのだと思う。

しづく垂れ雨中にとまる夜のバスへ干割れやまざる精神こころが乗るも

深川通り魔殺人事件の犯人川俣軍司について、のっぺらとした〈ヴァギナ〉的文化的氾濫する現代の都市空間に突如として出

現した凶暴な野生の《ベニス》そのものだった、と書いたのは藤原新也である。ほんとうにこの男は恐ろしかった。というより、人間は誰でも本来こんな具合に破滅的で、殺意に満ちた衝動を息苦しく抑圧しながら、退屈な日常を生き延びているに過ぎないことをあらためて思い出させてくれたというべきで、そっちの方がよくにはそら恐ろしかったのだ。

BVDのブリーフつけて血に濡れてかの日の川俣軍司といはし

例えば、ベイズリーヤストラライブのネクタイ、オックスフォード織りのボタンダウン、フラノのダブルパンツ、ウイングチップの靴、これに濃紺の三つ釦ブレザーを着ると最高にキマッタなんて思う団塊の世代のオシャレ感覚は、VANジャケットの圧倒的な影響である。石津謙介のスゴイ所は、要するに戦勝国アメリカのエリートたるアイビーリーガーの服装を、敗戦国のピンボーな敗兵の息子たちに着せて、ちっとはイイ思いでもして見ろ、なあオマエら、と肩をたたいてくれた点にある。よく考えたと腹立たしくもあるけれど、映画で見るジャック・レモンだとかジェームス・スチュアートのアイビー・リーガーぶりは何たってカッコよかったものなあ。

昔むかし着てゐたダツフル見あたらず冬も未来も真つ白だったころ

某先生の話によると、戦後の或る日、岩波書店にガラを届けに行ったの。応接間に通されたら、斎藤茂吉もそこにいたんだ。向こうは文化勲章でももらおうっていう大歌人で、こっちは若造だから緊張しちゃってね。それでも茂吉先生は気をつかってくれて、いろいろ気さくに話しかけてくれるの。そのうち、岩波の女事務員がお茶を運んで来た。この人が大変な美人でね。するとどうだい、キミ、今度ハサ、茂吉の方が彼女を意識して金縛りみたいになっちゃった。お茶を飲む手がブルブル震えるのさ。あの人、よっぽど純情な女好きだったんだね。

茂吉とふ電話に怯えし歌よみを不惑越えたるころより敬ふ

山修司に〈大工町寺町米町老母買ふ町あらずやつばめよ〉という道行きの歌がある。「面影橋から」という二十年前のフォークソングにも、やはり面影橋・天満橋・日影橋・いにしえ坂・わらべ坂・五番坂という具合に大阪の道行きぶりが唄われていて、ふと口をついて出て来る。こういう地名尽しの歌は、知らない町並みや辻や坂や川端をあてどなくほつつき歩いているような気分にくれて、ぼくは好きだ。

〈丸田町入〉の露地を入りゆけば猫と老婆に行き逢ふばかり

Tさんという何とも美しい詩を書く先輩がいた。身なりを構わない人で、いつもヨレヨレの白シャツに膝の抜けた黒ズボンで大学に来ていた。不精髻がいかにも汚らしかつたけれど、顔立ちは眼光炯炯として端正、アピシニアの草原を放浪するランボーの風情が漂っていた。カバンがわりに木製のマガジンラックを提げていることもあった。とんでもない酒乱で借金魔だということでもあった。鎌倉雪下の小林秀雄の自宅にしょっちゅう押しかけては、議論を肴に一升瓶を空けてしまったあげく、金を借りて帰るといふ噂もあった。しかし、同人誌に載ったTさんの詩は蒸留したように無垢で清潔な悲哀が張りつめていて、思わず息を飲むほどの美しさだった。言葉がこんなに美しくなるということに二十歳のぼくはひたすら驚愕した。畏敬の眼差しで遠くから眺めるだけで、ついにぼくがTさんと口をきく機会はなかった。卒業の前年の十二月、Tさんが凍てついた黒部ダムに入水して果てたという話を聞いた。ぼくはわけもなく、ああ、そうだったんだなあ、と思った。

炭酸のキックに蹴られ寒の夜をギネス飲みつつ死者をこそ思へ

開高健の酩酊および宿酔の描写はバツグンだった。(アルコールの輝かしい霧のなかで茫然となつてすくんでいると)だとか(耳のうしろあたりでハチのようになつていた昨夜のウイスキーの残り)だとか、とにかくキラメク表現がこの朦朧恍惚境ないしは嘔吐頭痛地獄に見事なイメージを与えてしまう。この種の筆力において開高健は天才だったと思うことがある。

失意ともわづかに違ふ一杯のマルチニ飲み干すまでの疼きぞ

父と一緒に釣りに行くことが子供時分の楽しみの一つだった。例えば初夏の頃、お台場沖に出る釣り舟に乗って、青鱈を釣る。釣れた鱈を釣り舟のオジサンが天麩羅にしてくれて、揚げたてのアツアツを船上で食べるのだが、これが美味しいんですねえ！青鱈は白鱈ほど上等の味ではないとされているが、あれ以上の鱈の天麩羅をその後、食べたことがないような気がする。

白鱈子の緊まる腹をぞ搔つさばくかかると手わざの女房よろしき

子供の粗雑な味覚でも、小学校の給食における脱脂粉乳だけはどうしても美味しいとは感じなかった。六年生の時、クラスにNさんという痩せて目ばかり大きな少女がいた。いつもみすばらしい服装をしていた。父親がアル中で働かず、母親はNさんや幼い弟妹たちを棄てて家を出てしまっていたこと、Nさんは弟妹の世話をしながら学校に通っていたことなどをずっと後になって知った。よく顔面を腫らしたり、青痣を作ったりしていたが、これも後で知ったのだが、父親に殴られていたらしい。このNさんが脱脂粉乳をよくお代わりするのだった。シチューの皿も嘗めたりもした。ぼくたちはこういうNさんを軽蔑し嫌悪していたが、今となつてはよく分かる。Nさんは毎日、死ぬほど腹を空かせていたのだ。脱脂粉乳の味なんかわからないほど飢えていたに違いなかったのだ。(ほんの昨日)の東京には、こういう子供がけっこういたのである。

舌といふ淫らきはまる肉塊を愉しませむと命を揚げゆく

三枝昂之だったか、(歌にとつて生活なんでもものは、たかだか生活に過ぎない。けれど、生活にとつても歌なんでもものは、たかだか歌に過ぎないのだ)という意味のことを言っていたが、実に言い得て妙である。こういう回路があるから、ぼくのような貧寒なマイナーポエツトでもしぶとく作歌が持続できるんだらうな。

つひに歌が生活越えざる苛立ちのトンボ鉛筆やたらと折れる

【論語】に(人四十にして悪まるれば、其れ終らんのみ)というオッカナイ一節がある。イヤなヤツというのは、だいたい四

十歳くらいで見事に本物のイヤなヤツになりおおせている例が多い。何かの対談で、高田保にイヤな爺さんだね、と言われた内田百閒が、貴君から取り立ててイヤな爺さんと呼ばれる筋合いはない、ただイヤなヤツがジジイになっただけの話だ、なんて言い返していたが、こういう憎まれ口は浮世離れしてて実によろしい。

或るときは鬼火のやうなる心にて不惑越えゆく一年を在り

大したのも書いちゃいけないのだけれども、安請け合いたした原稿の締め切り間際になって、これはもう死ぬしかないな、と思いつめることが年に一回はある。で、まだ生きているわけだから、それなりにやつつけては窮地を切り抜けて来たようだ。そういうのは活字になっても見る気がしないのだが、怖いもの見たさでふと読んだりしてしまう。おっ、けっこうイイ線行ってるじゃないの、なんて調子に乗って読み進むと、やがてキヤッと叫んでロクロ首。

稿一本、三本、四本と終えゆけばおお中年にみなざるリピドー

長崎の友人が時々、カラスミを送ってくれる。これは文句なくうまい。さだまさしの「朝刊」とかいうフヤケタ唄の中で、オッチョコの新妻がボクの好物のカラスミをわざわざ煮てダメにした、なんていう一節があるけれども、これはいかにも女子供をバカにした、見えすいた作り話である。それにだいたいカラスミを煮ちゃう女房なんぞはアワテ者どころか、単なる無神経なアホウに過ぎないよ。

冬海のボラの塩焼き喰ひたれれうちつけなれど疼かむばかり

少年時代、「芽生え」というイタリア映画に夢中になった。正確にはグエンダリーナという主役を演じたジャクリヌ・ササールという女優に夢中になったのである。何というか、もう実に、地中海のうたかたから生まれた妖精みたいに儂く美しい少女なのであった。しばらくは、寝ても醒めても地中海の妖精のことばかり想って、東洋の島国なんぞに生まれたわが身が情けなく切

なかつた。それから十年後、「アクシデント」というアメリカ映画に久しぶりに登場した彼女には昔日の面影がほとんど失われていた。ありていに言うと、オバサン風になつていたのだ。これもまた情けなく切ないことだった。

夕映えが少年少女を染めてゐるさあれまことに人生はつかの間タイムイズアスパン

とにかく人前で知つたようなことを喋るのは、恥ずかしいことだ。まして、お喋りを身すぎ世すぎの手段にするなんてのは生き恥をさらしてゐるようなものだ、と思うことがある。孔子や子路を生業とは無縁の口舌浮遊の徒として一喝する老農夫が「論語」に登場するが、あの親爺はエライ。人、生業にあらざれば、みな無頼、なのだ。

神経のそよぎやまざる夕まぐれひりひりと寒し口舌渡世は

例の湾岸戦争に対するぼくたちニッポン人のスタンスは実にウソ寒いものであった。伝家の宝刀《平和憲法》とかの精神を敢然として掲げることも出来ない、アメリカも裏切れない、オイル文明の御利益も現在の延長として享受したい、などというダラケタ優柔不断の中で国家国民こそぞってTVニュースにかじりついでただけだった。あれは、つまるところ任天堂ソフトの乗りで《対岸の火事》を愉しんでいたに過ぎない、とぼくは踏んでいる。

チヨビ髭は正義の敵とか呼ばれしがおお艶然とチヨビ髭わらふ

罪を犯した者は犯罪現場に必ず行つて見たくなるものらしいが、そういう心理は分かるような気がする。昔、TVで怪談ドラマを家人と観ていて、大笑いしたことがある。愛人の看護婦が出世の邪魔になるので、これを殺して幽霊に崇られる医者の話なのだが、この医者がなぜだか死体を棄てた廃井をしょっちゅう覗きに行くのである。そう頻繁に覗かれた日には幽霊だつて出なければおさまらないわけで、とにかく出る。出ると、また心配になつて覗きに行く。あ、こりゃ井戸に降りるな、と思つていて、これがホントに降りちゃう。よりによって、雷雨の激しい丑三つ刻にですよ。で、幽霊にたつぷりと鬨られて昇天するのだ

が、これには笑った。心理の機微を、こうあからさまに見せられると、何だかもうギャグ以外のなものでもない。

カサブタを痛がりながら剥ぎ取りてバンドエイドをあはれまた貼る

ラマ教の僧侶は魂魄を肉体から遊離させる修行を積むのだそうだが、熟達した者は自分の頭上から自身の姿が見えてしまったりするらしい。遊離した魂魄にともなう意識が見ているわけだ。ほくにはこれと似た感覚で、いま自分の心が見えているな、と感ずる一瞬がある。あれは心の内容が何であれ、実に広々とした自由そのものの感じを味わえて良い。で、その一瞬が過ぎ去ると、もちろん、その後はドロドロとしたいつもの混沌。

孕みぬし檻褸猫のこと連翹のこと孤児のこと思ふぞなにゆゑ

「いますぐ君はこの街に放火せよその焰の何とうつくしからむ」という歌が前川佐美雄の『植物祭』にあった。刻々と移ろう心の一瞬に形を与えるのが短歌だとすれば、こういう詩型をもったばかりたち日本人は、石川啄木じゃないけれど、実に幸福だといえる。あらゆる抑圧から解放されて、心の一瞬のスクリーンに炎え上がる街区の焰は、気が遠くなるほど自由で美しいではないか。

心とふ縁へ性なき気まぐれは水の辺欲する水の辺に行かむ

〈匹夫も志を奪ふべからず〉と言ったのは孔子だが、ほんとうにそうだ。敗戦直後の吉野秀雄には〈屑たばこを集め喫へれど志す高き彼物忘らふべしや〉というシケモク拾いの歌がある。〈志す高き彼物〉は何であるかわからないけれど、凜とした心意気が好きだ。ついでだけれど、太宰治は高級ブランドのシケモクしか拾わなかったそうで、上林暁が〈さすがは太宰君である〉などと書いている。何が〈さすが〉なんだかちっともわからない。

勝ち気なる鱷もあるべし茫々と想へば午後より愉快ぞつもの

「スタンド・バイ・ミー」という五十年代末を背景にしたアメリカ映画の中で、少年二人が指を鳴らしながら「ロリポップ」を唄って森の中を歩く場面がある。あれは実に懐かしかった。「ロリポップ」はほとんど同じ時期に子供だったほくも唄っていたんだから。もちろんコーデッツの原曲ではなく、伊東ゆかりの日本語版のコピーで。プレスリー、コニー・フランシス、アネット、ケイシー・リンデン、ニール・セダカ、ジョニー・ティロットソンといった五十年代から六十年代にかけてのポップスシンガーたちを通してほくの中の《良きアメリカ》は育った。極めつきはビーチ・ボーイズ。彼らのフォーフレッシュメン風の裏声のきいたハーモニーと軽快なリズムに乗って広がる、西海岸の陽光や潮風やホットロッドや陽気な学園風俗やサーフィンの波は、今でも輝かしい神話的な《良きアメリカ》そのものである。

なかんづく五十年代アメリカの晴朗無邪気が好きでたまらぬ

悪酔いさせる安物のジンのことを英語で blue ruin、宿酔のことを blue Monday というらしいが、よく感じが出ている。特に blue ruin、蒼い廃墟というのは味のある表現だ。たつたひとりの蒼い廃墟のなかでカサカサに乾いた感情やギーギー軋む精神をころがしておく、というのも悪くはない。だから、酒を飲む楽しみは荒涼たる廃墟に行き着くところにもあるのだとぼくは思う。

荒れ野ひとつ精神ココロにひろがる酔い醒めやしばらく俺は荒れ野に遊ぶ

五年前の大統領選挙の冬だったが、ソウルの三星デパートを一人ではつつき歩いていたら、毛皮売場にどつと入って行く若い日本人娘たちの一群とすれ違った。韓国ではヨーロッパの毛皮製品が安く手に入るのだが、彼女らはどう見ても二十歳そこそこの娘たちである。プサンのホテルでは、ボーイにいい娘がいるんだけど、お客さん、いくら出す、などと女衞まがいのことをされ

る。スタンドバーに入っても、どんな娘がいいの、と来る。キョンジュの夜の街で、鮮やかな原色のチマチョゴリを着た新婚旅行中らしき女性を見た。酔っ払った日本人団体旅行客の男たちが、彼女をその種の商売女と勘違いしたのか、卑猥な揶揄を浴びせて通り過ぎて行く。日本人は確実にソドムの民になっちまったのだ。反吐が出るぜ。

冴えわたる廁上の思惟のつづまりはニッポンいつそ滅ぶるがよし